

国語とキャリア教育

「自分を支える言葉を見つける」
「人と人をつなぐ絆としての言葉の大切さに気づく」
国語学習を通して、子どもたちに残したい
キャリア教育の視点を、
水戸部調査官にご提示いただきました。

変革のときを迎えた国語科

今、小学校国語科の授業づくりは、大きな変革のときを迎えています。
与えられた教材の与えられた場面を無目的に読み取るのではなく、自ら本に手を伸ばして読んだ作品のよさを推薦する。単に上手な作文を書くのではなく、相手や目的に応じて自分の思いや願いを手紙などで伝える。そうした、子どもたちが主体的に思考・判断し、実生活にも生きる言語活動を展開する授業が、全国に広がっています。

単元を貫く言語活動を位置づけた国語の授業づくりとは

こうした言語活動は、「単元を貫く言語活動」と呼ばれています。単元を貫く言語活動とは、単元で身につけたい国語の能力である、学習指導要領の指導事項などを確実に子どもたちに身につけさせるために、子どもたちの主体的な思考・判断が生かされる課題解決の過程となるよう、言語活動を、単元全体を通して一貫したものと位置づけるものです。従来の物語を読む授業では、

従来型の「読む」授業

- 物語文の全文を通読し、初発の感想を書く。
- 物語文を、場面ごとに細かく読み取る。
- 物語の主題をとらえ、学習のまとめをする。

といった学習が一般的でした。しかしこのような授業ばかりでは、例えばどの作品を読むのか、どの場面に着目して読むのか、読んでその結果どうするのかといったことを、子ども自身が考えたり判断したりする余地はほとんどありません。日常の読書生活では、そうした、自ら判断して読むような能力が、非常に重要になります。学習指導要領・国語においても、「本や文章を選んで

水戸部 修治

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所
総括研究官 教育課程調査官 学力調査官



読むこと」を、発達の段階に応じて各学年に位置づけているのです。そこで、無目的に場面ごとに読み取らせるのではなく、「自分の好きな本を紹介する」「自ら読んだ本のよさを推薦する」といった、子ども自身にとって魅力的な課題となる言語活動を、単元全体に一貫したものと位置づけて、「紹介するためにはしっかりと読む」「自分の選んだ作品のよさを多くの人に分かってもらいた

いから、優れた叙述をとらえて読む」といった主体的な意識を喚起する学習指導を進めていくのです。

キャリア教育と単元を貫く言語活動を位置づけた国語の授業づくり

このような、単元を貫く言語活動を位置づけた国語科の授業づくりは、キャリア教育の推進と密接に関わります。私は、「キャリア」を次のようにとらえています。

キャリアとは、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねである。

国語科における単元を貫く言語活動を位置づけた授業づくりでは、共通に設定された正解の解釈をいち早くつかむこと以上に、自らの課題を解決する過程を通して、自分ほどの

作品のどこに着目するのか、それを自分はどう読んだのか、それに対して自分はどうか考えるのかといった思考や判断を重視します。また同時に、「自分はこう読んだ」と考えられるからこそ「友だちはどう読んだのか」ということを知りたくなり、必然性のある交流が生まれてきます。子ども自身の主体的な思考・判断を重視した授業づくりを進める背景には、グローバル化や情報化などの急速な社会の変化があります。変化に対応する資質・能力を確実に育んでいくという点で、キャリア教育の考え方は、国語科の学習指導においても重要な鍵となるのです。

こうした授業づくりを行うには、教師自身の学力観の根本的な転換が必要で、つい、目先の指導にとらわれて、しっかりと読み取らせなくてよいのか、知識を教えこまなくて大丈夫なのかといった不安が出てくる場合もあるでしょう。しかし、このような学びを繰り返していくことによってこそ、これからの自分を支える言葉を見つけたら、人と人をつなぐ絆としての言葉の大切さに気づいたりすることができるといえます。

今、単元を貫く言語活動を位置づけた国語科の授業づくりは、全国各地で実践されています。こうした実践がいっそう根つき、さらに広がっていくことを期待しています。



次号～巻頭言特集

- 3号：笠井 健一
算数とキャリア教育
- 4号：村山 哲哉
理科とキャリア教育
- 5号：澤井 陽介
社会とキャリア教育